

東京キリスト召団創立55周年祭 祈禱会

感謝と讃美

――詩篇第46篇――

1995年9月24日

小池辰雄

感謝と讃美 神―キリスト―我 ルターの讃美歌

【詩篇46】

- 1 神はわれらの避所^{やけうしう}また力なり、なやめるとき^{いと}の最ちかき助なり。
- 2 さればたとい地はかわり山はうみの中央^{もなか}にうつるとも我儕^{われら}はおそれじ。
- 3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。
- 4 河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ至上者^{いとたかきもの}のすみたもう聖所をよろこばしむ。
- 5 神そのなかにいませば都はうごかじ、神は朝つとにこれを助けたまわん。
- 6 もろもろの民はさわぎたち、もろもろの国はうごきたり。神その声をいだしたまえ^{やべら}ば地はやがてとけぬ。
- 7 万軍のエホバはわれらとともになり。ヤコブの神はわれらのたかき櫓^{やぐら}なり。
- 8 きたりてエホバの事跡^{みわざ}をみよ、エホバはおおくの懼^{おそ}るべきことを地になしたまえり。
- 9 エホバは地のはてまでも戦闘^{たたかい}をやめしめ弓をおり戈^{ほこ}をたち戦車^{いくさぐるま}を火にてやきたもう。
- 10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。われはもろもろの国のうちに崇められ、全地^{みな}にあがめらるべし。
- 11 万軍のエホバはわれらと偕なり。ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

●感謝と讃美

詩篇46篇はマルティン・ルターの非常に好きな讃美歌で、「ルターの讃美歌」と言われるくらいです。

1 神はわれらの避所^{やけうしう}また力なり、なやめるとき^{いと}の最ちかき助なり。
文字通り、そのままですね。

2 さればたとい地はかわり山はうみの中央^{もなか}にうつるとも我儕^{われら}はおそれじ。



³ よしその水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。

これだけの熾んな信仰の歌は素晴らしい。

⁴ 河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ至上者いとたかきもののすみたもう聖所をよろこばしむ。

天界の都のことを書いています。これに相應する句が黙示録の終りの方にでています。

⁵ 神そのなかにいませば都はうごかじ、神は朝つとにこれを助けたまわん。

「たまわん」ではない。「たもう」です。私は「たまわん」なんて言われると、断定的に言ってももらわないと、気が抜けてしまう。

私はそのうちに新約聖書を翻訳するかもしれない。そうしたら、大胆な訳をしようと思う。とにかく、今の訳では力がこない。ギリシヤ語で未来形で書いてあったって、日本語に訳すときには現在形でいい。そんな外側の文法にしたがう必要はない。未来の事を言うから未来形で書くのだけれども、未来の事も現在化して受けとる。過去をすくい上げ、未来をきたらしめる。信仰は本当は現在なんです、永遠の現在です。

⁶ もろもろの民はさわぎたち、もろもろの国はうごきたり。神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ。

⁷ 万軍のエホバはわれらともなり。ヤコブの神はわれらのたかきやぐら櫓なり。

この7節は力強い言葉だ。

「万軍の神・キリストはわれらともなり」

という。旧約では「共なり」という言葉があるけれども、「うちに」ということは旧約では言わない。新約にくると、「うちに」ということが言えるんです。内在的になる。一緒にいるのではなくて、

「中にいたもう、わがうちに在りたもう」

というわけです。

「どんなにサタンの力がきても絶対に大丈夫だ」

という。私たちの日常の運命にはいろいろなことが起きるけれども、そういう外側の現象に決してとらわれないように。

「内的な本当の霊的な現実とは違うぞ」

ということ、常に勝つていく。運命環境のどういうことに対しても、本当の感謝と讃美ができる。何でも感謝と讃美ができる。キリストにあつては負けないですから。讃美と感謝しか知りません。それは烈々たる力の世界ですから。だから、私は圧倒されて生きている。「自分の信仰でなんか生きてません。私はキリストに圧倒されて生きてます」と言える。

私は、NHKで「宗教の時間」でもあれば、一席やりたいくらいだ。牧師さんたちはもつ



ともらしいことを言っている。ダメだよ、そんなのは。パウロや預言者たちが驚くようなことを逆に言っている。キリストはそれだけ凄いひとなんですから。

●神―キリスト―我

7 万軍のエホバはわれらともなり。ヤコブの神はわれらのたかき櫓なり。

とある。「われら」という言い方の奥には「わが」という単数がある。この単数を、

「神―キリスト―我」

という、一対一の関係を忘れてはダメです。複数で「われら」なんて言っていると、ヘタすると気がぬけてしまう。

「われ汝と共にあり、われ汝のうちにあり」

という、そういう「我―汝」という上からの響きを受けとらないとね。私はそういう隠れた、聖書に書かれてない、その奥の神の言を受けとらないと、承知しないような魂だから。「われら」の奥に「われ」という単数でもってあなた方は読んでください。

「神―キリスト―我」

という一対一の関係です。それから「我ら」というのが出てくるので「我ら」が先ではない。それは決して単なる個人主義ではない。私は主義という言葉は嫌いだ。真理の世界は主義ではダメなんだ。

「ヤコブの神は、キリストはわがたかき櫓である。わが城である、わが避所である」ということです。

8 きたりてエホバの事跡をみよ、エホバはおおくの懼るべきことを地にたまえり。

これは出エジプトからずっと、そういう歴史を思っている言葉です。

9 エホバは地のはてまでも戦闘をやめしめ弓をおり戈をたち戦車を火にてやきたもう。

この9節の言葉は素晴らしい。こういう凄い言葉は、考えたって出てこない。これは神さまの示しを受けて圧倒されて言っている言葉です。「火にてやきたまわん」でなくて、「火にてやきたもう」ということ。

10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。われはもろもろの国のうちに崇められ、全地にあがめらるべし。

11 万軍のエホバはわれらと偕なり。ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

「汝等しずまりて我の神たるをしれ」

とは素晴らしい。「しずまりて」というのは

「静かに沈黙して祈っている」

ということ。「知る」というのは頭で知るのではない。全身で受けとることです。ヘブライ



語の「知る」「ヤーダッハ」という字は、そういう

「存在的に受けとる」

ことをいう。旧約によく「知る」という言葉が出てきますが、そういう存在的な言葉ですから、決して頭で知っているのではない。

●ルターの讃美歌

この詩篇46篇からマルティン・ルターは讃美歌を作った。そのルターの讃美歌を私は訳した。

『我らの神は堅き城なり』（私訳）

1 我らの神は堅き城なり。

攻防自在の武器なるぞ。

今や我らは苦難に遭えど、

神は一切の助けなり。

かの古昔よりの悪しき仇敵

今や真剣に抗い来たる。

大なる権力多くの謀略は

その強悍しき武器にして

現世に彼の敵なし。

2 我らの力何をか為し得ん、

我ら忽ち失わるべし。

我らのために戦う義人あり、

神自らの撰びの人ぞ。

たづぬるか、かは誰と。

その人はイエス・キリスト、

万軍の主なる御神ぞ。

いかなるあだし神にも非ず。

戦の場はその聖手にあり。

3 縦いこの世は悪魔に満ちて

我らを全く吞まんとすとも、

我らいたくは戦慄かじ。

勝利なお我らにぞある。

此の世の君主はいかばかり、

立腹に立ちほだかるも、

何ごとも我らになし得ず。



彼はすでに審判さばかれてあり。
聖言みことばの一言、彼をば倒す。

これはルターが好きな句です。「キリスト」という名前を言うと、サタンは恐がって逃げます。我々が「主さま、キリストさま!」と叫ぶだけで、サタンは逃げて行ってしまう。これが

「聖言の一言、彼をば倒す」

ということです。

4 その徒輩やから聖言を空しうす、

これに一念の感謝あらなく。

聖子みは戦の場にて我らくみに与す、

彼れの聖霊みたまと恩恵めぐみもて。

敵どもは取らば取れわが生命いのち、

財たからも誉ほまれも子も妻も。

すべてのものを奪い去れ!

彼ら何をか勝ち得んや。

神の国こそ我らには在れ。

そういうルターの讃美歌です。これは本当に戦闘の人、宗教改革者らしい歌だ。

アッシジのフランチェスコとダンテとルターはキリスト教の歴史で非常に大事な三人です。ダンテの『神曲』も素晴らしい。ダンテは『神曲』一巻を書いただけで、彼は不滅な人です。地獄・煉獄・天国と、よくああいうものを書いたな。あれは19年間の流浪の旅のうちに書いたんですよ、机に向かつて書いたのではない。彼は自分の故郷から追い出されたんだから。なにしろ、聖書一巻は凄い。特に新約聖書になると凄い。旧約では預言書と詩篇。新約では福音書、パウロの書翰。天来の力で書いているから、考えて書いた本ではないから。聖書は意味ではない。聖書を読んで、そういった力を受けとらなかつたら、聖書を読んでないんだ。

「論語読みの論語しらず」

というけれども、

「聖書読みの聖書しらず」

ということだ。

皆さんと、こうやって語りあっていると、一番私は楽しい。あなた方は大事な兄弟姉妹たちです。ありがとうございました。

